

古典, 古文書における「かしは」に関する研究
—「かしは」はカシワ (*Quercus dentata* Thunb.) か—

服部 保・南山典子・松倉 隆

兵庫自然研究会報告第1号

兵庫自然研究会

はじめに

古典などには「かしは」(柏, 栢, 榲, 榲, 榲, 榲)の記述が少なくない。「かしは」は大きな葉を持つ植物の総称として用いられることもあるが, 単一種の名称として用いられている例が多い。「かしは」を単一種の名称とみなした例では, 国文学, 国語学, 植物分類学の研究者のほとんどは「かしは」を標準和名のカシワ (*Quercus dentata* Thunb.) に同定している。しかし, 上代において「かしは」の記述されている地域は近畿地方が多いにもかかわらず, カシワの地理的分布をみると近畿地方には非常に少なく, 「かしは」とカシワの分布は一致していない。

そこで著者らは「かしは」の古典等における記述内容を検討し, 「かしは」の使用事例の一覧表を作成し, 「かしは」が標準和名の何種に該当するのかを検討した。

その結果, 少なくとも上代の「かしは」はナラガシワ (*Quercus aliena* Blume) であること, 江戸時代の「かしは」はカシワとナラガシワの両者が混乱して用いられたことが明らかとなったので, これらのことについて報告する。

調査方法

隋書(7世紀), 古事記(712年), 播磨国風土記(715年), 日本書紀(720年), 万葉集(8世紀), 住吉大社神代記(8世紀), 源氏物語(1007年), 平家物語(13世紀)などの史書, 古典, 古代文書, 古代辞書, 本草書に記述されている「かしは」を検索し, 「かしは」の記述内容, 古典等の資料の名称, 著者, 年代, 注釈書の著者名の一覧表を作成した。

播磨国風土記と住吉大社神代記には「かしは」の分布について地名が記されているので, それらの分布地の一覧表と, 分布地の位置を示す図を作成した。

延喜式には「かしは」の貢進地域名が記されている。それらの地域の図化を行った。なお, 「かしは」の葉は神事, 仏会, 節会, 法会などの儀式に供え物を盛る皿状の葉盤(ひらで)を作るために用いた。乾燥させた葉や青葉が用いられた。

「かしは」以外に「かしは」の語の前に別の語を結合させた複合語の「〇〇かしは」(例えば「あからがしは」)を検索した。それらの古典植物名(江戸時代の本

草書に用いられている植物名も含めて, 古典等に載せられている植物名を古典植物名とした), 古典等の資料の名称, 植物の特徴, 対応すると考えられる標準和名およびその根拠となる文献の一覧表を作成した。

「かしは」は, ブナ科コナラ属コナラ亜属に含まれるコナラ (*Quercus serrata* Mur.), クヌギ (*Quercus acutissima* Carr.), ナラガシワ, カシワとの関連が認められるので古代辞書, 本草書において上記植物に対する古典植物名の記載の有無やそれらの古典植物名の漢字表記を調査した。「かしは」については万葉仮名の表記も調べた。

上述の調査結果をもとに標準和名のコナラ, クヌギ, ナラガシワ, カシワに対する古典植物名をまとめた。また, 中国の図鑑類(Hu & Chun 1927; Yang 1998)をもとに上記の種の中国名を調べ, 一覧表を作成した。

江戸時代の本草書におけるコナラ, クヌギ, ナラガシワ, カシワの古典植物名と標準和名の対応関係を各文献ごとにまとめた。

調査結果

44の古典等の資料より「かしは」に関する記述を検索した結果を表1に示す。

隋書の倭国の巻に, 「榲」の葉に食物を盛るという記述があり, 「榲」が「かしは」とすると, 隋書が「かしは」の記録としては, もっとも古い資料となる。国内では古事記の「柏」がもっとも古い資料であった。古事記より15世紀までの「かしは」の資料は播磨国風土記・住吉大社神代記, 新撰字鏡, 伊勢物語, 大和物語, 枕草子, 源氏物語など, 奈良, 京都を中心とした近畿地方の「かしは」に関連するものであった。江戸時代に入ると, 江戸における「かしは餅」や本草学に関連する「かしは」の記録が多かった。

播磨国風土記, 住吉大社神代記における「かしは」の分布地を表2, 図1に示す。

分布地はいずれも兵庫県内の瀬戸内側に位置していた。

延喜式に記されている「かしは」の葉の貢進は年間400万枚に達するほど膨大な量であり, それらは播磨, 摂津, 丹波, 山城, 河内, 大和の6地域であった。それらの6地域の位置を図2に示す。

6地域は, いずれも京に近く, 畿内またはその周辺にあり, 現在の近畿地方内に位置していた。

表1. 各種資料における「かしは」の語句の記述.

番号	西暦	資料名	著者・編者	記述内容	文献
1	7c.	隋書	魏徵	倭国では櫛(かしは)の葉に食物を盛る	藤堂ほか(2010)
2	712	古事記	太安万侶	大御酒の柏を	武田(1977)
3	715	播磨国風土記	—	柏が生えているので柏野, 柏原	浅田(1981)
4	720	日本書紀	舎人親王	柏のひらでの如くしてあがれ(豊後)	坂本ほか(1967)
5	739	豊後国風土記	—	直入郡にかしは	木村(1988)
6	8c.	万葉集	大伴家持	秋柏・朝柏・あから柏 ¹⁾	服部ほか(2010)
7	8c.	住吉大社神代記	—	采女に柏の葉をとらせた. 采女山から畦野	田中(1985)
8	801	類聚三代格	—	祓料物として柏の葉	細見(1992)
9	898	新撰字鏡	昌住	苜(加志波) ²⁾	塙(1933)
10	9c.	伊勢物語	—	柏をおほいて. 柏にかけり	渡辺(2007)
11	905	古今和歌集	紀貫之ほか	小野の本柏	細見(1992)
12	918	本草和名	深江輔仁	櫛(櫛)若葉(加之波)	正宗(1926)
13	927	延喜式	藤原時平ほか	摂津, 丹波, 播磨, 山城, 大和, 河内からの櫛(柏)の貢進(年400万枚)	黒板(1977), 細見(1992)
14	931	倭名類聚鈔	源順	櫛, 柏(加之波)	中田(1978)
15	951	後撰和歌集	村上天皇ほか	櫛の葉の葉守の神のましけるを ³⁾	片桐(1990)
16	977	蜻蛉日記	藤原道綱母	柏木の木高きわりより	柿本(1967)
17	10c.	大和物語	—	柏木に葉守の神のましけるを	阿部・今井(1957)
18	1004	枕草子	清少納言	柏木いとおかし葉守の神の	池田(1963)
19	1007	源氏物語	紫式部	柏木に葉守の神の. 柏木	山岸(1963)
20	1086	後拾遺和歌集	白河天皇ほか	櫛の葉柏もつ葉なし	細見(1992)
21	1190	山家集	西行	柏	細見(1992)
22	1205	新古今和歌集	藤原定家ほか	葉びろ柏に, 柏木のもり	峯村(1974)
23	1265	続古今和歌集	九条基家ほか	櫛の葉柏紅葉して	細見(1992)
24	1286	釈日本紀	卜部懷賢	ひらで, 柏葉に物を盛る也	細見(1992)
25	13c.	平家物語	—	柏	高木(1960)
26	1310	夫木和歌抄	勝田長清ほか	櫛の柏木. 神山の柏のくぼて. 柏原	細見(1992)
27	1371	太平記	小島法師	柏	木村(1988)
28	1478	大乘院寺社雑事記	—	庭園木として柏の利用を記述	飛田(2002)
29	15c.	蔭涼軒目録	—	庭園木として柏の利用を記述	飛田(2002)
30	1641	俳諧初学抄	斎藤徳元	かしはの記載なし ⁴⁾	松田(1970)
31	1661	酒餅論	—	端午に, ちまきの餅やかしは餅	松田(1970)
32	1680	俳句之岡	不卜	かしは餅, 玉柏	松田(1970)
33	1681	東日記	池西言水	かしは餅, 柏木の森	松田(1970)
34	1697	本朝食鑑	人見必大	櫛(かしは)は葉も大きく潤い	島田(1976)
35	1708	大和本草批正	貝原益軒	櫛をくぬぎ, こなら, ならがしは, くりかしはに分類. ならがしはは三河国猿が馬場でかしはもちに利用	上原(1961)
36	1713	和漢三才図会	寺島良安	枹(かしは)で, 粽をつつむ	島田ほか(1990)
37	1716	東雅	新井白石	柏, 飲食の物を盛るに葉を	上原(1961)
38	1808	月令博物笥	鳥飼洞斎	かしは餅は天明の頃から	上原(1961)
39	1823	武蔵名所図会	植田孟綏	柏の葉を伐出し, 節句前に江戸へ	上原(1961)
40	1825	物品識名	水谷豊文	かしはの別名としてははそ, なら	水谷(1825)
41	1827	桑都日記	塩野適斎	柏葉の市は水無瀬川北岸	上原(1961)
42	1829	草木錦葉集	水野忠敬	かしはの園芸種として羽衣柏, 松源柏, 金玉柏, 水野丸葉柏を記載	水野(1829)
43	1842	古今要覧稿	屋代弘覧	江戸のかしはは京都ではえどかしは	屋代(1842), 細見(1992)
44	1847	重訂本草綱目啓蒙	小野蘭山	櫛実(ははそ)をこなら, こぼうそ, おほぼうそ3種に分類. ははその別名がかしは. かしはで粽をつつむ.	井口(1978)
45	1865	草木図説	飯沼愨斎	櫛(ははそ)をおほぼうそ, こぼうそ, こならに分類. 大垣ではおほぼうそにかしはの名をつけて粽をつつむ	北村(1977)

1): 柏の名がついているがアカメガシワ. 2): 保保加志波なども記載. 3): 葉守の神は柏にやどるが, ここでは櫛にやどるとしている. 4): 17世紀以降, 俳諧書に季語として「かしは餅」が記載されるが, 本書には記載がないので, 1640年代以降「かしは餅」が盛んになったと推定される.

表2. 播磨国風土記(715)¹⁾と住吉大社神代記(8c.)²⁾に記された「かしは」の産地.

番号	文献の地名	現地名	記述内容	文献
1	播磨国讃容郡柏原里	兵庫県佐用郡佐用町徳久	柏が多く生えているので柏原里	1
2	播磨国宍粟郡柏野里	兵庫県宍粟市千種町一帯	柏が多く生えているので柏野里	1
3	播磨国揖保郡上岡里 殿岡	兵庫県たつの市神岡町	岡に柏が生育	1
4	播磨国揖保郡広山里 佐々山	兵庫県たつの市誉田町広山 笹山(177m)	山の柏をとって帯にかけ	1
5	摂津国川辺郡大神郷畝野	兵庫県川西市畦野	柏の葉を采女に取りに行かせた	2

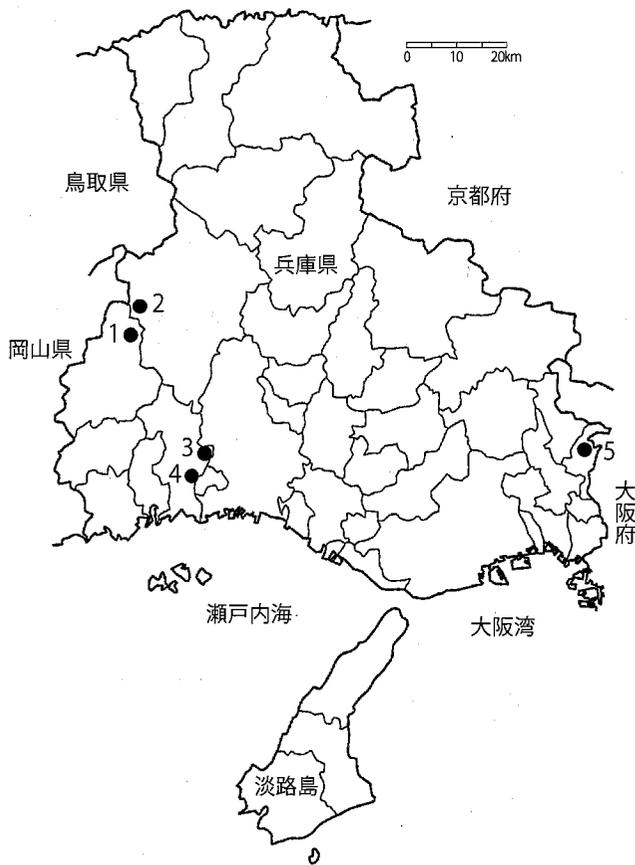


図1. 播磨国風土記(715)と住吉大社神代記(8c.)における「かしは」の分布地. 番号は表2の番号に対応.

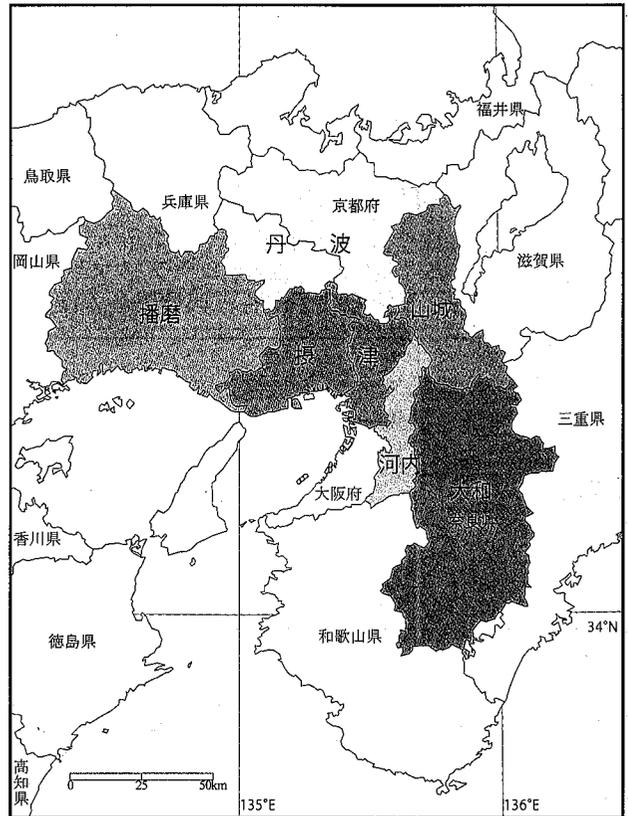


図2. 延喜式(927)に記載されている「かしは」の貢進地(山城国, 摂津国, 丹波国, 播磨国, 河内国, 大和国).

「かしは」および複合語の「かしは」の語を持つ古典植物名を調べた結果を表3に示す。「①あきがしは, あさがしは, あからがしは」, 「②ほほがしは」, 「③みつながしは・みつのがしは」, 「④このてがしは」, 「⑤はりまがしは, ながめがしは」の9種を確認した. それらの古典植物名に対して①は「アカメガシワ (*Mallotus japonicas* (Thunb. ex Murray) Muell. Arg.)」, ②は「ホオノキ (*Magnolia obovate* Thunb.)」, ③は「カクレミノ (*Dendropanax trifidus* (Thunb.) Makino)」, ④は「コナラ」が対応していると考えられ, ⑤は不明であった.

古代辞書, 本草書におけるコナラ, クヌギ, ナラガシワ, カシワに対応する古典植物名の記載の有無およびそれらの古典植物名の漢字表記を表4に示す.

10世紀前の資料では漢字名に対して万葉仮名がつけられているので, 漢字名と古典植物名との対応が可能であった. 「かしは」は柏, 榭, 榲, 枹, 苜などの漢字が用いられていた.

クヌギ, コナラ, ナラガシワ, カシワに対応する古典植物名, 中国名を表5に示す.

クヌギに対する古典植物名は「くぬぎ」, 「つるばみ」で混乱はなかったが, コナラ, ナラガシワ, カシワで

表3. 「かしは」の名を持つ古典植物.

古典植物名	資料名	特徴	標準和名	文献
かしは	—	広い葉をもつ樹木の総称	—	細見(1992)
かしは	古事記, 延喜式ほか	「榲, 柏」, 儀式に使用	ナラガシワ, カシワ ¹⁾	—
あきがしは	万葉集	川辺のかしは	アカメガシワ	服部ほか(2010)
あさがしは	万葉集	川辺のかしは	アカメガシワ	服部ほか(2010)
あからがしは	万葉集	赤いかしは, 稲見野のかしは	アカメガシワ	細見(1992), 服部ほか(2010)
ほほがしは	新撰字鏡ほか	酒器として利用	ホオノキ	細見(1992)
みつながしは	万葉集, 延喜式	「三角柏」, 熊野で採取	カクレミノ	細見(1992), 服部ほか(2010)
このてがしは	万葉集	「児の手柏」, 小さなかしは	コナラ	細見(1992)
はりまがしは	延喜式	「播磨榲」, 造酒式に使用	アカメガシワ	細見(1992)
ながめがしは	延喜式	「長女柏」	不明	—

1): 江戸時代以降かしわ餅に利用したのはカシワ.

表4. 辞書・本草書における標準和名コナラ, クヌギ, ナラガシワ, カシワに対応すると考えられる古典植物名の記載の有無. 表中の漢字は各古典植物名の漢字表記. +は各古典植物名のカナ表記の存在を示す.

資料名 ¹⁾	新撰 字鏡 ²⁾	本草 和名 ³⁾	倭名 類聚鈔 ⁴⁾	大和 本草 批正 ⁵⁾	和漢 三才 図会 ⁶⁾	東雅 ⁷⁾	物品 識名 ⁸⁾	重訂 ⁹⁾	草木 図説 ¹⁰⁾
								本草 綱目 啓蒙	
西暦	898	918	931	1708	1713	1716	1825	1847	1865
古典植物名									
なら	榲, 榲, 椎, 柞	・	榲	・	榲	+	+	+ ¹¹⁾	・
こなら	・	・	・	+	・	+	+	+	勃落樹 ¹²⁾
ははそ	榲, 榲, 榲	・	柞	+	柞	+	・	榲実 ¹³⁾	榲 ¹⁴⁾
こぼうそ	・	・	・	・	・	・	・	+	+
おほぼうそ	・	・	・	・	・	・	・	+	+
ならがしは	・	・	・	+	・	+	・	・	・
くりがしは	・	・	・	+	・	・	・	・	・
くぬぎ	榲, 榲, 柞	榲若葉 ¹⁶⁾	釣樟	榲	榲	+	+	榲	榲
かしは	首 ¹⁵⁾	榲若葉	榲, 柏 ¹⁷⁾	・ ¹⁸⁾	枹 ¹⁹⁾	柏	柏	+ ¹¹⁾	・ ²⁰⁾
かしはの 万葉仮名	加志波 ¹⁵⁾	加之波	加之波		加之波				

1): 辞書類・本草書. 2): 埴(1933). 3): 正宗(1926). 4): 中田(1978). 5): 上原(1961). 6): 島田ほか(1990). 7): 上原(1961). 8): 水谷(1825). 9): 井口(1978). 10): 北村(1977). 11): 榲実をははそと訓じ, なら, かしはを別名として記載. 12): 勃落樹をこならと訓じ, 榲(ははそ)の一種と記載. 13): 榲実をははそと訓じ, こなら, こぼうそ, おほぼうそに分類. 14): 榲をははそと訓じ, こぼうそ, おほぼうそなどに分類. 15): かしはの複合語として, 厚木(保保加志波, ほほがしは), 石葦(公弥及加志波)などの記載あり. 16): 榲は榲とも記載. 17): 柏に加之波と加閉(カへ)の両種を記載. 18): かしはの記載はなく, ならがしはを用いたかしは餅を記述. 19): 枹を包むと記載. 20): かしはの記述はなく, おほぼうその別名としてかしはを記述しているほか, 園芸種としてはごろもがしは, ほそばがしはを記載.

は標準和名と古典植物名とは1対1では対応しておらず、混乱が認められた。

大和本草批正(1708年)、和漢三才図会(1713年)、重訂本草綱目啓蒙(1847年)、草木図説(1865年)におけるクヌギ、コナラ、ナラガシワ、カシワの古典植物名と標準和名の対応関係を図3に示す。

表5と同様に図3においてもクヌギと「くぬぎ」は1対1で対応したが、コナラ、ナラガシワ、カシワについては古典植物名と標準和名は一致せず、混乱していた。

中国名においてもナラガシワとカシワについては榲欐という同じ漢字が用いられており、混乱が認められた。

考察

「かしは」の漢字

「かしは」は柏、栢(柏の異体字)、榭、榭、栢、苜(柏の誤りか)などの漢字によって表記されていた。もっとも多く用いられていた栢は、本来ヒノキ科の植物を示している(前川 1981)。栢が国内において「かしは」にあてられた理由は不明である。

「かしは」に用いられた漢字は国内だけで用いられている栢を除くと、榭(榭は榭の誤字で榭の本来の意味は松脂)などが用いられている。「かしは」が榭とす

表5. 標準和名クヌギ、コナラ、ナラガシワ、カシワの学名およびそれらに対する古典植物名、現在使用されている中国名。

標準和名	学名	古典植物名	中国名
クヌギ	<i>Quercus acutissima</i> Carr.	くぬぎ, つるばみ	櫟, 柞, 麻櫟
コナラ	<i>Quercus serrata</i> Mur.	なら, ははそ, こぼうそ	青栲櫟
ナラガシワ	<i>Quercus aliena</i> Blume	かしは, ははそ, なら, おほぼうそ, ならがしは	榲欐, 孛孛櫟
カシワ	<i>Quercus dentata</i> Thunb.	おほぼうそ, かしは, ははそ	榲, 榲櫟, 榲樹, 柞櫟

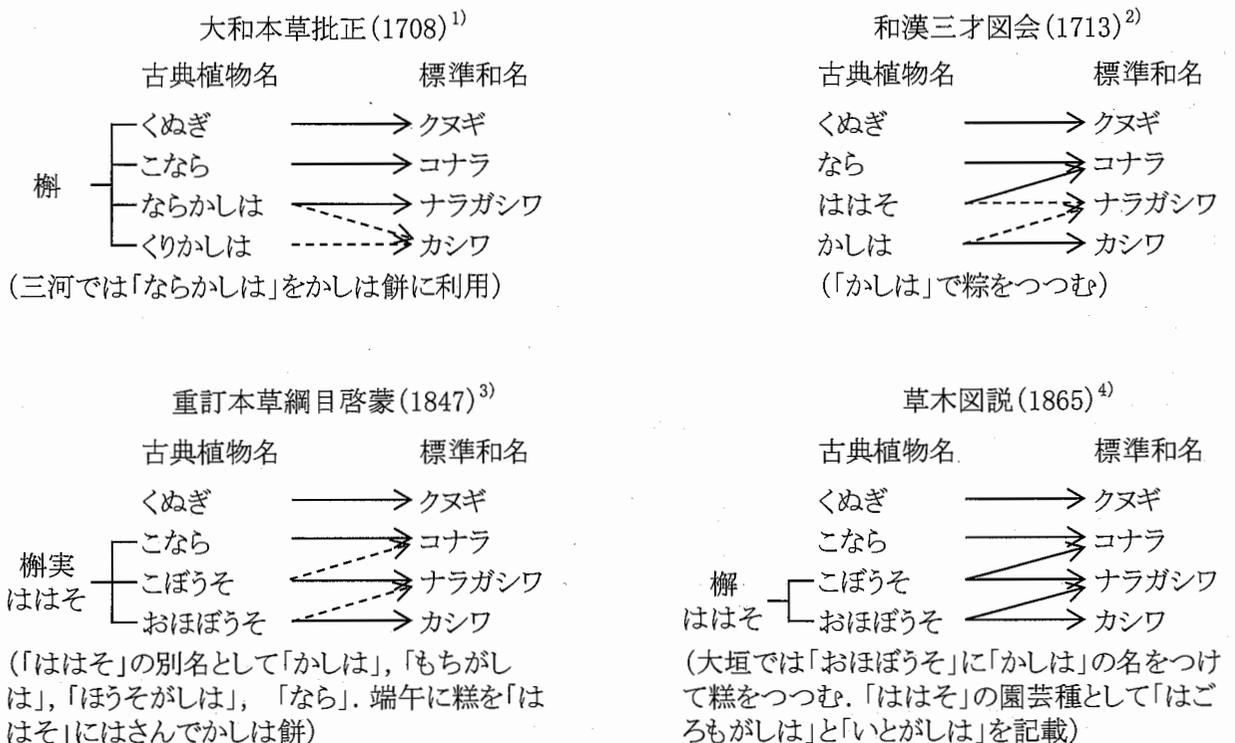


図3. 標準和名のクヌギ、コナラ、ナラガシワ、カシワと本草書に記載されている古典植物名の対応関係。本草書の「くぬぎ」にはアベマキ、「ははそ」、「なら」にはミズナラも含む。破線は可能性があることを示す。1):上原(1961). 2):島田ほか(1990). 3):井口(1978). 4):北村(1977).

ると、表 5 の現在の分類学上ではカシワ (*Quercus dentata* Thunb.) は榲に対応しているので、「かしは」=榲=カシワとなり、「かしは」はカシワであることになる。しかし、表 4 では「ははそ」、「くぬぎ」にも榲の漢字を用いているのでカシワだけが榲ではなく、「かしは」=カシワとはなっていない。したがって、漢字の解析では「かしは」の実態を明らかにできない。

「かしは」はカシワか

複合語の「〇〇がしは」については表 3 に示した標準和名以外に様々な説 (例えば「このてがしは」はコノテガシワ説、「みつながしは」はオオタニワタリ説など) があるが、単語の「かしは」は総称以外では、カシワであるという説が小清水 (1941)、上原 (1961)、松田 (1970)、前川 (1981)、木村 (1988)、牧野 (1989)、山田・中嶋 (1995)、渡辺 (2007) など多くの研究者によってまとめられている。「かしは」はカシワであるという説に対して、細見 (1992) は「かしは」はカシワではなく、コナラであるという新しい説を提唱した。

「かしは」がカシワであるのか、他の種であるのかということについては、「かしは」の分布とカシワあるいは他種の地理的分布を比較することによって推定できると思われる。

室町時代以前の「かしは」

室町時代以前の「かしは」の存在あるいは利用を示す地点の地理的位置は、表 1、図 1・2 が示すように豊後国風土記などの例を除くと、ほとんどが近畿地方内に存在している。このような「かしは」の分布に対して、カシワが同じような地理的分布を有していれば、「かしは」はカシワの可能性が高くなる。

Horikawa (1972, 1976) に基づいたカシワ、コナラ、ナラガシワの地理的分布図 (図 4) の中のカシワの地理的分布をみると、その分布は九州から北海道まで広いが、北海道、東北地方の海岸や山地帯に分布中心をもち、近畿地方では分布の空白域が広い。このような地理的分布と「かしは」の近畿を中心とする分布は対応していない。

詳細に検討するために、広畑・近藤 (2007) などに基づいて、作成した兵庫県下におけるカシワの地理的分布図 (図 5) と図 1 の「かしは」の分布を比較してみると両者の分布の差は非常に大きい。

これらの結果は、細見 (1992) の詳細な古典に基づく「カシハ」はカシワではないとする明快な解析結果

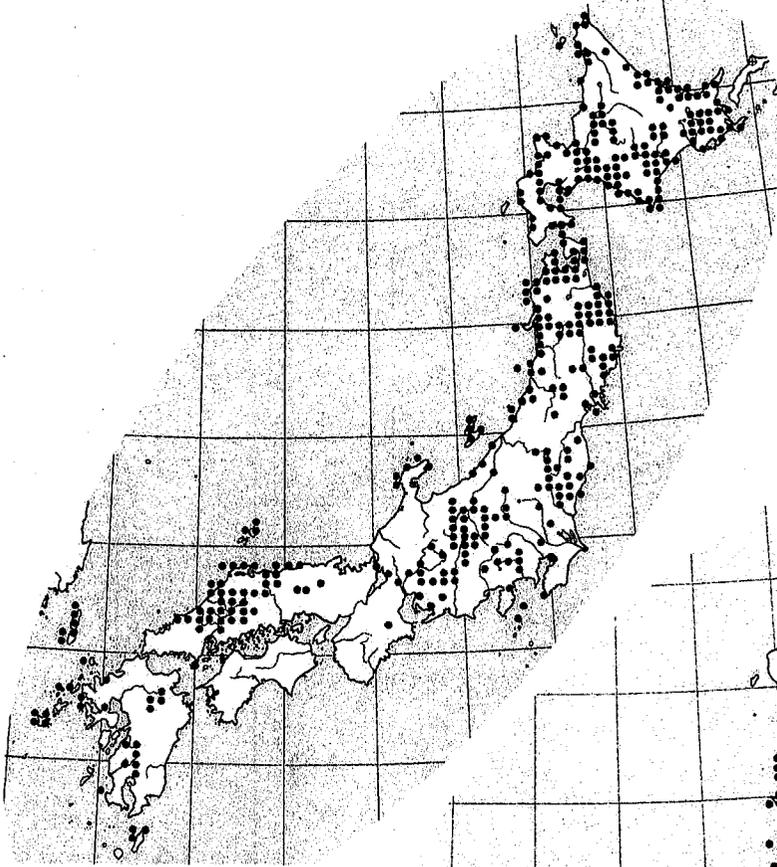
と一致し、「かしは」は明らかにカシワではないことが示された。

細見 (1992) の「かしは」はカシワではないとする説は上記のように正しいと考えられる。しかし、「かしは」をコナラとすることには大きな問題があるように思われる。第 1 は「かしは」の葉は大きいことが前提となっており、大きな葉を持たないコナラを「かしは」とするには無理がある。第 2 は「かしは」がコナラであるならば、コナラは九州から北海道まで広く、また多量に分布している (図 4)、何百万枚であろうとも京の近くで採取可能であり、摂津、播磨、丹波などより納めさせる必要はないと考えられる。また、コナラには古典植物名でいう「なら」、「ははそ」などが対応しており (表 5)、表 4 より「なら」、「ははそ」と「かしは」は別種として古くより取り扱われてきた。以上の点より「かしは」とコナラとは異なると認められる。

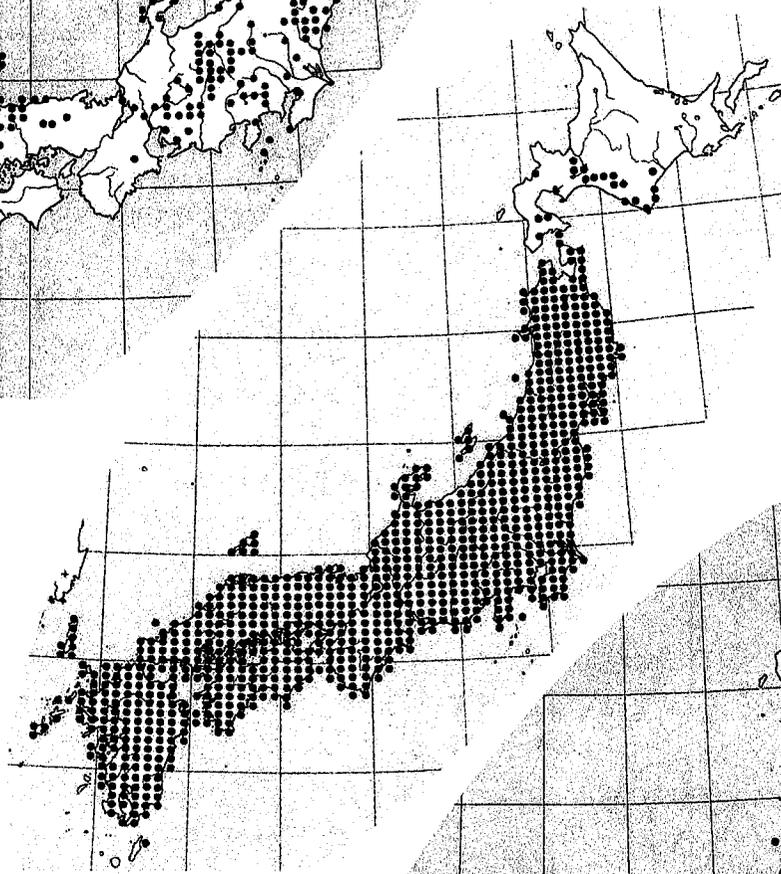
大きな葉を持ち、カシワとよく似た葉を持つ種として、ナラガシワがあげられる (図 6)。近畿地方ではカシワが冷温帯の草原付近や海岸の崖地に限られて分布しているのに対して、ナラガシワはコナラほどのごく普通の種ではないが、暖温帯から冷温帯の二次林に広く生育している。ゼフィルス、ヒロオビミドリシジミ、ウラジロミドリシジミなどの食草としてもよく知られているために、詳細な分布がよく調べられ (田中 1980; 仲田 1982; 福田ほか 1984; 小坂 1994; 広畑・近藤 2007; 小岩屋 2007)、前述した「かしは」の貢進地である播磨、丹波、摂津、大和、山城、河内一帯に広く分布していることが明らかにされている (図 4)。また、住吉大社神代記に記されている兵庫県川西市畦野一帯には現在もナラガシワが生育しており (図 5)、畦野を含む猪名川上流域や武庫川中流域では近年までナラガシワは 5 月の節句のちまき (もちをナラガシワで包んだ上に、さらにツルヨシの葉でそれを包み込んだもの。2 種類の植物を使用するちまきはたいへん珍しい。神聖な「かしは」の葉で包んだちまきを神に供えた。現在、兵庫県川西市黒川と同宝塚市西谷でごくわずかに作られている。) に広く使用されていた (服部ほか 2007a, b)。さらに、播磨国風土記の柏野、柏原近くにもナラガシワの生育が認められ (図 5)、ナラガシワの地方名として、かしわが残っている地域も多い (八坂書房 2001)。以上の点から室町時代以前の「かしは」はナラガシワとするのが妥当と考えられる。

なお、ナラガシワとカシワの相違点の一つは図 6 に

カシワの分布



コナラの分布



ナラガシワの分布

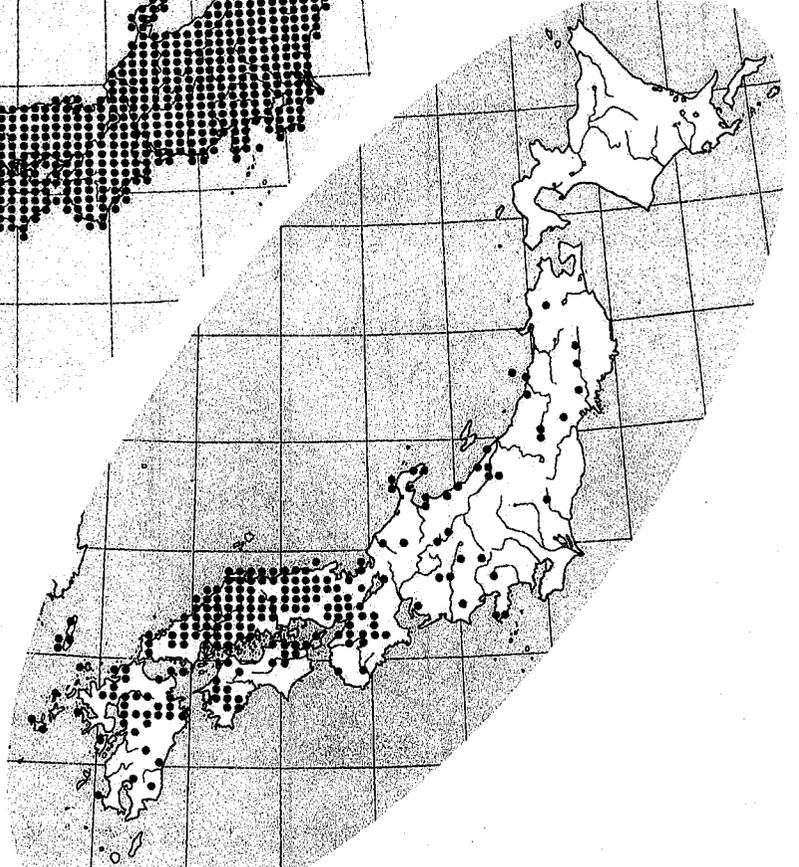


図4. Horikawa (1972, 1976) に基づくカシワ, コナラ, ナラガシワの地理的分布 (一部服部が修正).

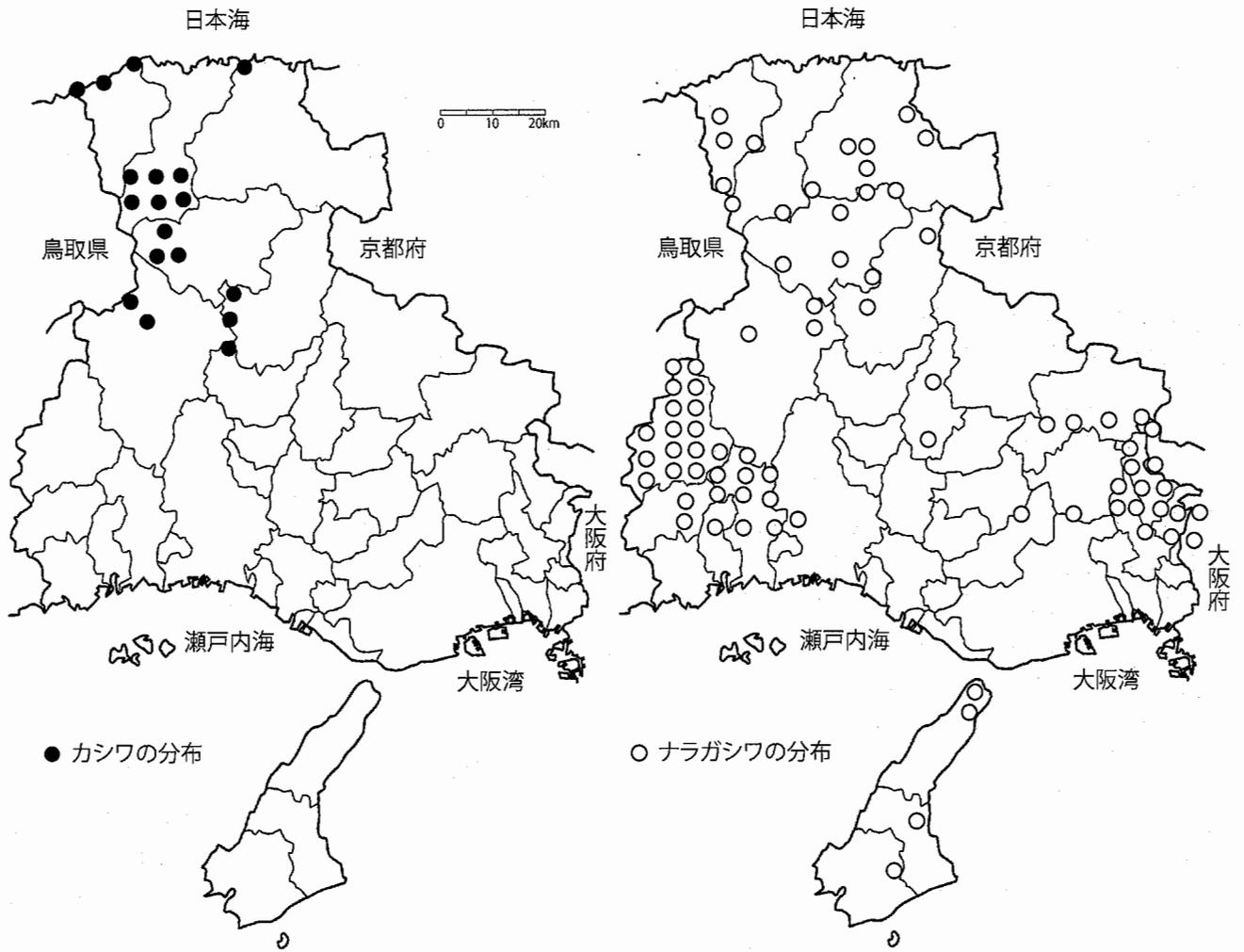


図5. 兵庫県におけるカシワ, ナラガシワの分布.

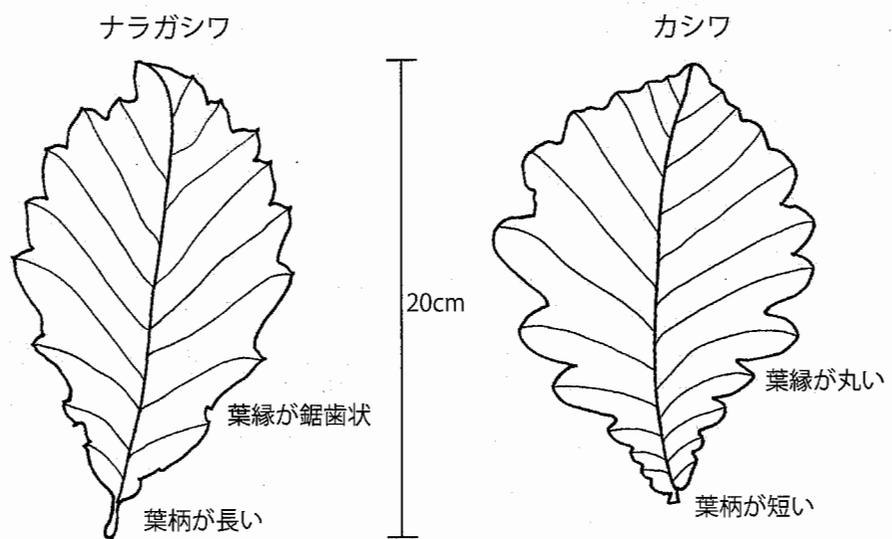


図6. ナラガシワとカシワの葉の違い (縮尺 3/10).

示したように葉柄が明瞭であるか否かであるが、平安時代に意匠されたと考えられている「かしは」を用いた紋章の中で葉の全体がわかる抱鬼柏，抱柏の葉柄は明瞭であり，それらの紋章はナラガシワを見本としたように考えられる（図7）。

また，ナラガシワは秋には黄褐色に紅葉し，カシワほどではないが，冬季に枯葉が枝から落下せずに残る。これらのことより表1番号23の「柏紅葉して…」や表1番号17, 18, 19などの「柏木に葉守の神の…」（「かしは」の葉は冬に落ちないことから葉守の神が「かしは」に宿るとされた）とナラガシワは矛盾していないことがわかる。

江戸時代以降の「かしは」

江戸時代に入り，1660年ごろにかしは餅が俳諧の季語として採用されると，かしは餅に関連する「かしは」の記述が多くなる。「かしは」の葉の採取地や市の場所が明確に記されており，少なくとも江戸でかしは餅に使用された「かしは」は間違いなくカシワである。また，水野（1829）の草木錦葉集には「かしは」の園芸種として羽衣柏，松源柏，金玉柏，水野丸葉柏が図示されており，これらの図をみると，これらの柏（かしは）はカシワの園芸種と認められる。以上より江戸時代に庶民や武士が江戸で用いていた「かしは」はほぼカシワに該当すると考えられる。ただし，地方によっては図3に示したように，カシワ以外に，ナラガシワが，かしは餅に用いられた可能性はある。

問題は本草学で用いている「かしは」である。江戸時代の図3に示した代表的な本草書におけるクヌギ，コナラ，ナラガシワ，カシワの取り扱いであるが，クヌギ以外の記述が不明確で，古典植物名と標準和名が対応していない。特に「かしは」については和漢三才図会以外は種名として採用せず，「かしは」に対応する種に「ははそ」，「ならかしは」，「くりかしは」，「おほぼうそ」などの種名をつけている。また，「ははそ」の別名として「かしは」を，「おほぼうそ」の俗名として「かしは」を用いており，本草家は「かしは」の名称を意図的に避けているように見える。さらに，コナラ，ナラガシワ，カシワの分類上の取り扱いが混乱しており，江戸の住民が少なくとも「かしは」を，かしは餅の葉として明確に認識していたことと対照的である。その代表は1865年にまとめられた飯沼慾齋の草木図説（北村 1977）である。草木図説は近代の植物分類学の視点からまとめられた本草書で，学名も記され，

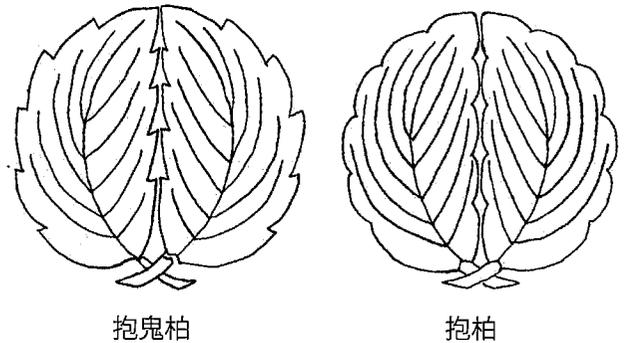


図7. 「かしは」を用いた紋章。抱柏，抱鬼柏は共に葉柄が明瞭でナラガシワ風。葉縁の形は抱柏がカシワ，抱鬼柏がナラガシワ風。

標本も残されているほど進んだものであるが，記載内容，図，残された標本より，図3に示したように，「こなら」，「こぼうそ」，「おほぼうそ」については標準和名と対応しておらず，「おほぼうそ」はカシワとナラガシワの2種を，「こぼうそ」はナラガシワとコナラの2種を各々含んでいる。

江戸時代においては江戸のかしは餅に用いる「かしは」や園芸種の「かしは」はカシワと認められたが，江戸以外のかしは餅の「かしは」や一般的に用いられている「かしは」についてはカシワだけではなく，ナラガシワも含まれていた可能性が高い。

「かしは」という用語が誕生し，古典等に使用されてきた経緯を考えると，江戸時代にはカシワが主流となったにせよ，「かしは」として古くから使用されていたナラガシワにカシワという標準和名を与えるべきであったと考えられる。

謝辞

本研究を進めるにあたり，能勢電鉄株式会社 信田 修次部長，サントリーホールディングス株式会社の山田 健部長，岩崎 良課長のお世話になりました。厚く御礼を申し上げます。

本研究はサントリーホールディングス株式会社コーポレートコミュニケーション本部エコ戦略部の研究助成の一部を使用いたしました。

文献

- 阿部俊子・今井源衛 校注 1957. 日本古典文学大系, 大和物語. 岩波書店, 東京.
- 浅田芳朗 1981. 図説播磨国風土記への招待. 柏書房, 東京.
- 福田晴夫・浜 栄一・葛谷 健・高橋 昭 1984. 原色 日本蝶類図鑑 (Ⅲ). 保育社, 大阪.
- 埴保己一編 1933. 群書類従第 28 号, 新撰字鏡. 続群書類従完成会, 東京.
- 服部 保・南山典子・黒田有寿茂・橋本佳延 2007a. カシワモチ, チマキ等の食物に利用する植物 (葉) の記録. 人と自然, 18 : 127-150.
- 服部 保・南山典子・小川靖彦 2010. 万葉集の植生学的研究. 植生学会誌, 27 : 45-61.
- 服部 保・南山典子・澤田佳宏・黒田有寿茂 2007b. かしわもちとちまきを包む植物に関する植生学的研究. 人と自然, 17 : 1-11.
- 飛田範夫 2002. 日本庭園の植栽史. 京都大学学術出版会, 京都.
- 広畑政己・近藤伸一 2007. 兵庫県の蝶. 兵庫昆虫同好会, 神戸.
- Horikawa, Y. 1972. Atlas of the Japanese flora. Gakken Co., Tokyo.
- Horikawa, Y. 1976. Atlas of the Japanese flora II. Gakken Co., Tokyo.
- 細見末雄 1992. 古典の植物を探る. 八坂書房, 東京.
- Hu, H. & Chun, W. 1927. Icones Plantarum Sinicarum. Commercial Press, Shanghai.
- 井口望之 重訂 1978. 日本古典全集, 重訂本草綱目啓蒙. 現代思潮社, 東京.
- 池田亀鑑 校注 1963. 日本古典文学大系, 枕草子. 岩波書店, 東京.
- 柿本奨 校注 1967. 角川文庫, 蜻蛉日記. 角川書店, 東京.
- 片桐洋一 校注 1990. 新日本古典文学大系, 後撰和歌集. 岩波書店, 東京.
- 木村陽二郎 1988. 図説草木辞苑. 柏書房, 東京.
- 北村四郎 校註 1977. 草木図説. 保育社, 大阪.
- 小岩屋 敏 2007. 昆虫図鑑シリーズ 5, 世界のゼフィルス図鑑. むし社, 東京.
- 小坂利明 1994. 猪名川流域の蝶. 詩画工房, 能勢.
- 小清水卓二 1941. 万葉植物. 三省堂, 東京.
- 黒板勝美 校訂 1977. 新訂増補国史大系, 延喜式. 吉川公文館, 東京.
- 前川文夫 1981. 植物の名前の話. 八坂書房, 東京.
- 牧野富太郎 1989. 牧野新日本植物図鑑. 北隆館, 東京.
- 正宗敦夫 校訂 1926. 日本古典全集, 本草和名. 日本古典全集刊行会, 東京.
- 松田 修 1970. 増訂 万葉植物新考. 社会思想社, 東京.
- 峯村文人 校注 1974. 日本古典文学全集, 新古今集. 小学館, 東京.
- 水野忠敬 1829. 草木錦葉集第 3 卷. 大雅堂, 京都.
- 水谷豊文 1825. 物品識名. (覆刻版 1980). 青史社, 東京.
- 仲田元亮 1982. 増補改訂能勢の昆虫 (蝶の部). 仲田元亮, 川西.
- 中田祝夫 1978. 倭名類聚抄, 元和 3 年古活字版, 附関係資料. 勉誠社, 東京.
- 坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野 晋 校注 1967. 日本古典文学大系, 日本書紀上. 岩波書店, 東京.
- 島田勇雄 訳注 1976. 本朝食鑑 1. 東洋文庫, 東京.
- 島田勇雄・竹島淳夫・樋口元巳 訳注 1990. 和漢三才図会 15, 東洋文庫. 平凡社, 東京.
- 高木市之助 校注 1960. 日本古典文学大系, 平家物語. 岩波書店, 東京.
- 武田祐吉 訳注 1977. 新訂 古事記. 角川書店, 東京.
- 田中 蕃 1980. 森の蝶・ゼフィルス. 築地書館, 東京.
- 田中 卓 1985. 住吉大社神代記の研究. 国書刊行会, 東京.
- 藤堂明保・竹田 晃・影山輝国 全訳注 2010. 倭国伝, 中国正史に描かれた日本. 国宝社, 東京.
- 上原敬二 1961. 樹木大図説 I. 有明書房, 東京.
- 渡辺久寿 2007. 柏 (かしわ). 「知つ得古典文学植物誌」 (国文学編集部編), 185. 学燈社, 東京.
- 山岸徳平 校注 1963. 日本古典文学大系, 源氏物語. 岩波書店, 東京.
- 山田卓三・中嶋信太郎 1995. 万葉植物事典, 万葉植物を読む. 北隆館, 東京.
- Yang, T. 1998. A list of Plants in Taiwan. Natural Publishing, Taipei.
- 八坂書房編 2001. 日本植物方言集成. 八坂書房, 東京.
- 屋代弘覧 1842. 古今要覧稿. (覆刻版 1982). 国書刊行会, 東京.

古典、古文書における「かしは」に関する研究
— 「かしは」はカシワ (*Quercus dentata* Thunb.) か—

兵庫自然研究会報告第1号

2015年8月1日

著者	服部 保	兵庫県立大学名誉教授
	南山典子	兵庫県立人と自然の博物館特任研究員
	松倉 隆	サントリーホールディングス株式会社

発行者 服部 保

発行所 兵庫自然研究会
〒664-0896 兵庫県伊丹市船原 1-4-5